

寺紋の役割

ブランドを象徴するアイテムに紋がある。今、本願寺の紋は下り藤(西六条藤)である。しかし、このステイタス・シンボルが昔からあったわけではない。明治以降の話である。

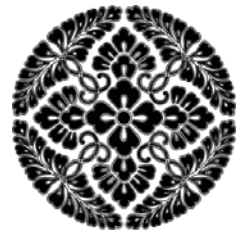
本来の本願寺の紋を調べてみると蓮如上人まではすべて牡丹唐草紋、実如上人は日野一流の鶴丸紋、証如上人は八藤紋、顕如上人は五七桐紋、江戸時代の歴代は何れも五七桐紋で変わらない。明治になって時代は動く、明如上人は一時、菊紋を、そして鏡如上人が下り藤紋と、変化する。紋はその時代時代にめまぐるしく変わる。しかも、特定の紋を寺紋とするといった定格もなければ概念もない。もともと紋は門主(法主)と



大谷光瑞門主(鏡如上人)
1876-1948 本願寺第22世門主。明如上人の長男で皇后の姉九条篤子と結婚。本願寺の近代化に尽力する。大谷探検隊を組織し、西域仏教遺跡を調査し、近代仏教学に貢献する。



西六条紋(通称・下り藤)
明治31年に大谷光瑞門主の内室・篤子(九条家より入籍)が九条家より入籍。その時に九条藤を家紋としていたが、九条藤をもって大谷家の家紋とした。これを西六条藤という。



八藤紋
証如上人衣用紋で本徳寺実円が拝受した紋である。中世より本徳寺の由緒紋として、袈裟紋をはじめ本堂の役瓦紋や破風の紋、仏具や御文章箱、幔幕紋などに使用されている。



しての人格的個人に附与されるものだ。もちろん、近代的な挿げ換えのできる責任主体としての個人ではない。集団の中でその役割を自他共に自覚されて発現してくる個人である。

あえて寺紋の必要性を考えると、組織が一新されたり緊張状況に置かれると結束せねばならない。その必然として組織を象徴する寺紋が対外的に出てくると言うわけだ。

組織の脆弱な覚如上人から蓮如上人までは紋の必要性も乏しい。従って、後から門主紋を贈ったものだろう。牡丹唐草紋で統一されている。蓮如上人の時に本願寺教団は確立するが、実如・証如・顕如上人の急速な教団拡大と対抗勢力の台頭にともない紋もその都度変化して行く。一方、江戸の安定期にはほぼ桐紋で統一されている。近代の時代的変革の中で再び紋は変化を見せ始める。明如上人の菊紋、鏡如上人の下り藤のごとくである。

鏡如上人の下り藤紋は上人の御内室・篤子夫人が入輿の際に九条家から持ってこられた九条藤



五七桐紋
この紋は太閤桐よりく問違えは遡られるが、それより時代は拝受した1559年以降使用。上掲写真は寺法物箱の絵である。下写真は大門築地堀の役瓦である。いずれも桐紋が刻印されている。



だ。欧米列強の脅威に曝されたこの時代、日本の近代国家の体制をにわかに取り繕うため、エンペラー(天皇)を中心にした貴族制度を敷くことになる。そのため、本願寺門主は初めて姓を持ち、華族・大谷家を構える。その際、それまでの内司依紋・鶴丸を排し、九条家の了解を得て九条藤を大谷宗家の紋に使用したということだ。実際の西六条藤(下り藤)は九条藤を一部変えてある。それ以後、宗門の各組織にこの紋が流用されることになった。

ところで、本徳寺の大谷家の紋は本家同様に下り藤であるが、本徳寺の紋は八藤紋と五七桐紋が使われている。この由来を問うと中世まで遡る。本徳寺実円と本願寺証如との関係から生じたものである。

少し詳しく述べると、円如上人(実如の長子)ご早世により、証如上人は若千十歳で法主職を継承する。その際、生前の実如上人から、上人の孫・証如上人の後見として、その大役を本徳寺実円が託された。その功勞により、本徳寺実円は証如上人からその法主紋である八藤紋を使用することを許されたということだ。それ以降本願寺と同様に八藤紋が使用されることになる。紋の使用にはそれなりの歴史的な由縁がないと成り立たないらしい。

証如期に本願寺は絶頂を迎え、門跡に列せられ、五七桐紋を使用するようになる。従って、次代・顕如上人の紋は五七桐紋である。それに連動して本徳寺は勅許院家に列せられ、五七桐紋を使用するようになった。このように本徳寺の内陣袈裟や建造物、什物に見られる八藤紋と五七桐紋は中世の本願寺教団の趣を色濃く残している。

玄智の考信録にも、本願寺が石山から京都西六条に移転後も、石山の風情を残すために八藤紋と桐紋を御影堂やその他の建造物に残したことを記している。